

紅い花

(六) 孤独な学校

琉 紅

(六) 孤独な学校

翌日、浦添の空は風も無く、日光が強く照りつけ、まだ残暑が続いていた。

城下町の一角にスル養成所があった。新しく調達した木材らしく全体が肌色で、木の香りが漂っている。人通りも多い。

大広間では、三人の指導者を中心に、全島から集められた女性が四人ずつ、前後二列に分かれて座っていた。

養成所での最高の権威者、大君によつて美久が紹介される。「入所の時期は過ぎたが、新しい者が入ります。名前は……」

美久は最前列の右横、とても視線の厳しい女性と目が合つた。

(私と同じ年くらいかしら)

きつめに髪を結っているせいだろうか、目が吊り上がり見える。祝い日によく見かけるような黄色を基調として、赤糸で花の模様の刺繡された着物を羽織っていた。

「ちょうど、青江あおえと同じ年くらいだね」

と、大君は「青江」と呼んだ女に目を向け、同意を求めた。

気になつていた女性だった。美久も彼女に対して目で挨拶をするが、青江は拒否するかのように視線をそらした。

「歳が近いので話も合うでしよう。さあ、この琉球を守つてくださいね」

と、大君は二人を交互に目を配り微笑んで、「それに青江は、ト師ぼくしの勉強もしています。人の運命や、未

來の予測に関しては、右に出る者はいないのですよ。美久も彼女から習うと良いでしよう」

青江はそれを聞いて、笑みを浮かべた。

大君は大広間を退席し、他の指導者が、皆に今日の日程を伝えた。

青江の隣に立つてた美久は、初めての養成所での生活に胸を躍らせていた。

「はじめまして、久高島の美久と申します。よろしくお願ひします。青江さんっておっしゃいましたよね、どちらの出身なのですか」

(牧港)

「まあ、あの賑やかな港町ですね。私も行つたことがあります。そこが最初の一歩になつて、本島に入りました。大きな船から品物が沢山降ろされて、取引されているわ。うらやましいわ。私がいた島は何もない。青江さんは久高島へ行つたことがあります?」

美久の嬉しさのあまり、青江の顔色が変わっていくことに

気がつかなかった。

青江の、蜘蛛の巣のように張られた神経を逆撫でしていた。

新入生の癖に生意氣と、

「ちょっとうるさいわね。なれなれしく名前を呼ばないで。

私の方が先輩なんですから、言葉に気をつけなさい……それに、知念村とか、あの島が見える近い場所にいくと、何故か、

気分が悪くなるのよ。私には、あの辺は合わないので。久高島のヌルを信望する武将も多いと聞くし、そのまま、島にいても十分でしょ…………」

青江はそう言い残すと、大広間を出て行った。

遠巻きにその様子をみていた他の女子らも、その場にはもう関わりたくないのか、そそくさと退室した。

(島に帰れ、と言いたいのね。勉強することが目的なんですから。一人でも大丈夫。しつかり学んで賢龍様に恩返しをしなければ)

その頃、浦添城の本丸にて、賢龍は中山王・尚思紹（しょうししゃう）と謁見（えつけん）をしていた。

王は、美久が元中山兵の娘と知り、彼女を歓迎することを約束してくれた。

南の窓からは、建築中の首里城が目前に広がっている。周

りの城壁を三重にも構築されていた。

別れ際、中山王子・尚巳志が参上した。小柄だが、霸気に溢れ気概がある。

賢龍と尚巴志は双頭の龍と、巷から噂されていた。

龍の口から炎、いや言葉が今、交わされようとしている。

賢龍からだ、

「中山は年々、明との貿易で利益が増えているとか。まさか、

独り占めにすることを考えてはいませんか、巴志殿？」いや、

尚巴志殿でしたね。明の国から『尚』という姓をいただいた

とか。さすがにやり手ですね。実権はすべてあなた様が掴んで

いるのでしょうか？」

「何を言っているのやら。明との交易は盛んなほうがいい。

賢龍殿もそう思っているはず」

「尚巴志殿、あなたは何を考えているのですか？」

「はっはっ、何を考えているかと。この琉球の行く末じやよ。

次に王になるそなたも同じであろう。さすが戦う城で育った

だけあり、中々の覇気じやのう」

立ち上がりその場から去っていく尚巴志。

その姿を彼は、疑心暗示で眺めた。

美久の授業は、大和や明国歴史に移っていた。

大和の源氏と平家の戦いである。地位と権力、実際の武力のぶつかり合いである。兄弟の血肉の争いとながっていく。明国による、未だに巨大な勢力を持つていた蒙古対策だった。琉球の北から南の距離よりも数倍にも及ぶ長城がある。それをさらに強化して進入を防ぐ、という話だった。

更には、千数百年以上も前の春秋戦国時代で、二十万人余の兵士の処分。

美久は、立ち上がって退出しようとした。

「おい、まだ途中だぞ」

と、先生は大声を発する。

青江もそれを否める視線を美久に投げかける。

美久は、

「そんな、戦いの授業は聞きたくありません。まつりいん祭事だけで結構です」

「ふざけるな！」

と、癪癪かんしゃくを起こし机を叩き、美久に駆け寄った。

今にも右手で平手打ちを食らわすか、投げ飛ばさんとする

剣幕だ。

美久の視線はひるむことなく、教師に向かっている。

急遽、大君が呼ばれた。

先生に耳打ちすると、彼は豹変した。

「これは、美久様、失礼しました。ここへ来てまだ日が浅く、新しいことばかりでお疲れなのでしょう。さあ御退席ください。続きは後日お教えしますのでご安心を」

と、急にかしこまつた返事をする。

美久もびっくりしたが、青江もぽかんと口が開いた状態で、

先生と大君を凝視した。

（何、美久って女は何者なの。大君は何を知っているの）

青江は、感情が抑えられず手に持つ筆の先が折れかかるほど、机に力強く押し付けた。

その日の夕方、美久は朱字で書かれた文を警備兵に見せ、養成所の寮から外出していく。生徒が夜に外出するなど、絶対に許されないことである。

焦る気持ちを抑えて早足でかけていく美久の姿を目のあたりにした青江の怒りは、最高潮に達していた。

訳を聞くまでは部屋を出ないと、大君の部屋へすごい剣幕で向かっていった。

「大君様、あの美久への対応は何ですか。あれでは他の者に示しがつきません。何故、あの女のわがままを許すのですか。納得出来ません」

大君の顔を見るやいなや、詰め寄った。

「まあまあ、青江よ。落ち着きなさい。あの美久という者は、

特別でのう。だからこの時期に養成所へ来たのじゃ。今は詳

しくお前に教えることはできないが、そのうち分かる時が来

るであろう。きっと我々の切り札になる。ト師の青江なら、

そのことは分かるじやろう。よろしく頼むぞ、有能なお前を

期待しているぞ」

これ以上、口の堅い大君からは何も聞き出せないと判断し

た青江は、

「わかりました。大君様ために一番お役に立てるのは私、青江です。大君様のためなら命をかけることができます。私を

決して見捨てないでください」

子供が母親にすがるような眼で、大君を見た。

「もちろん、分かつておるぞ。青江」

と大君は青江の手を取つて頷いた。

部屋に戻るなり、青江は美久を占つてみた。

彼女の出身地から、言動、今に至るまでの事を祈りに捧げて、得られる結果は、

『二ライカナイからの力が及んだ』

と出ている。それが何なのか、

『彼女に、得体の知れない未来からの力が、風となり……触

れた』

と、何度占つてもそのような意味を示す。

字が書かれた細い竹を引き抜き、絵が描かれた紙を選ぶ。

そんな確率的な要素を含んだもの、と考えていた青江は驚

愕した。やがて寒気に変わり、鳥肌が立つた。

意識の深部から恐怖を駆り立てられ、寝付くことができなかつた。

一方、美久は姉の所在が書かれた手紙を片手に、にぎわう那覇の街に出た。

通りすがりの人々に聞きながら姉を訪ね歩く。

那覇の港にある出島に渡る。異国風な屋敷が立ち並ぶ一角、

かなり大きな屋敷にやつとのことでたどり着いた。彼女はそ

こに姉がいると噂を聞いた。接客業をしているとの話だ。

美久にはどういう仕事かは分からぬ。しかし、尋ねた人々が、女はみな嫌な顔をしたり、男はニヤニヤと笑つて答える。あまり良くない仕事であることは想像できた。

(手紙では家事手伝いとあつたのだけれど。それって仕送りも出来るほどお給料がいいのかしら)

屋敷の前を掃除していた者に、久高島の妹が來たと伝えてもらつた。

しばらく待っていると、姉はその家の主人に引きつられて玄関先に現れた。

「まあ、美久！ 久しぶりね。元気だつた？」

「お姉さん。ここで働いているの」

姉は主人の顔をちらちら見ながら、小声で美久に事情を説明した。

那覇へ出稼ぎに来たが、なかなか仕事が見つからなかつた。それで早く久高島に仕送りがし、知念村出身という女にこの仕事を紹介されたという。

久高島と知念村は船の行き来もあるので隣村のよう親近感があり、その人が紹介する仕事ならと間違いないだろうと引き受けた。

姉の仕事内容を詳しく知りたがつたが、時折涙をながしながら話す姉に、それ以上聞くことはできなかつた。

「姉さん、父さんが亡くなつた場所へ行きたいの」

姉は、父が亡くなつた場所ができるだけ詳しく伝えたが、美久には土地勘がない。

「じやあ、連れて行つて」

「えつ、無理よ。一人では外へ出ることができないの」

「大丈夫、私に任せて」

そこで姉と一緒に出掛けたいと主人に掛け合つた。

主人は即座に断わつたが、話の中で偶然出たヌル養成所の名を聞き、急に態度を翻した。それほど、尚巴志の設置したヌル養成所は権威が高かつたのである。

もう日が完全に暮れていたが、姉妹は月夜のわずかな光を頼りに、浦添にある平原にたどり着いた。美久はその場に泣き崩れた。

（お父さんは、ここで……）

姉は、後ろから優しく見守つた。

大地には馬のひづめの跡、人々の足跡が交差していた。矢で刺した穴、刀の切傷の様な凹みが、幾重にもあつた。美久はそれをなぞるように手で触れる。

（ああ、戦は嫌。^{いのち}土がかき乱されて、汗や血を吸つてゐるわ。汚れている）

「お姉さん！」一緒に島に帰りましょう。新しい仕事を見つけ、私も働くわ

姉の心に訴えるように話す。

「無理よ」

「どうして？」

「借錢しているから。だからあなた達に十分な仕送りができるのよ」

美久は勢い歩み寄り、

「私はもう大丈夫。ヌル養成所にいるから、もうお金はいらないのよ」

「いまさらそんなこと言われても」

と、美久にあきらめを即する視線を向けた。

「嫌、お姉さん！」

二人は足の力を失い、冷えた土の上に座り込んだ。

すずり泣く声は、風を揺らし伝わっていく。

雲は月を隠さず、二人の姿は見られてしまいそうだった。

三日後の朝、姉はひょっこり養成所に来ていた。

右手に風呂敷に包んだ荷物を持ち、着物はこの前、会つた時より質素であったが、体全体が喜びに溢れキラキラと輝いていた。

「美久、私、久高島に帰れるのよ。一緒に帰りましょう。別の仕事を探しましよう」

「えつ、何があったの」

「それが、とても不思議なの」
姉は、主人に急に帰つてもいいと言われたと、美久に伝え
た。

何故かは、検討がつかなかつた。

主人が突然借金は無くなつた、と言って少しばかりの給金まで渡したのだ。

理由は決して話さなかつた。

北から不意に風が吹いてきて、美久の髪がなびかせた。

美久は、その場で立ち尽くすと、鳥肌が立つた。
さらに続く北からの風を受けながら、その方向に目を細くした。

つづく